



題字は、明治 39 年 10 月 1 日陸軍大臣寺田正毅から外務大臣林董宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
紋様は、尾形光琳：『八橋蒔絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

目次

- 「東京湾海堡ファンクラブ見学会」のご案内
- 「日本の激流の中で」ビデオ上映会報告
- 海堡夢想 小沢洋
- 入会案内

「東京湾海堡ファンクラブ見学会」のご案内

下記のとおり、海堡見学会を開催いたします。
今回は、富津岬を中心に、海堡にゆかりのある場所を見学します。皆さまふるってご参加ください。

記

- 主催 : 東京湾海堡ファンクラブ
- 開催日 : 3月19日(土) 13:00~16:00
- 集合場所 : 富津公民館(受付開始: 12:30)
- 見学コース : 大乘寺(海堡建設犠牲者の碑があります。)→長秀寺(海堡建設犠牲者の碑があります。)→元洲砲台(海堡と同時期に建設された砲台跡です。)→富津岬(富津岬先端の展望台から第一海堡を望みます。)→埋立記念館(富津の歴史が分かります。)
- 参加費 : 無料
それぞれの場所が離れているため、参加者の方の車に分乗して行いたいと思います。富津公民館の駐車場は広いので、お車での参加を歓迎いたします。

- 申込み方法 : 下記事項を記入の上、FAX・葉書・E-mail のいずれかの方法で事務局までお申し込みください。
 - ① 3月19日見学会参加希望
 - ② 氏名(ふりがな)
 - ③ 連絡先(電話番号)〈できれば携帯電話の番号をお願いします。〉
 - ④ 車で参加されるかどうか。

●申込み締切 : (3月17日)
事務局 : 東京都台東区東上野 2-7-6
(株)地域開発研究所内
担当 : 高橋悦子
tel. 03-3831-2916 fax. 03-3836-4048
e-mail: kaihoufc@babu.jp

- 申込み記入例**
- ① 3月19日(土)の見学会に参加希望。
 - ② 海堡太郎(かいほうたろう)
 - ③ 03-1234-5678
 - ④ 車で参加します。

「日本の激流の中で」ビデオ上映会報告

2005年2月27日（日）富津公民館において、L.ハステレン監督作品「日本の激流の中で」のビデオ上映会を行いました。17人の会員の参加がありました。

この作品は、明治初期のオランダ技術者が日本の土木に果たした役割を地元関係者のインタビューでまとめた映画です。また、オランダ技術者の心境・家族に宛てた手紙などをドラマ仕立てで織り込んでいて、当時の外国人が日本をどのように感じていたかも知ることができます。

ご希望があれば、東京や横須賀でもビデオ上映会を開催しますので、皆様のご要望をお待ちしております。

（事務局 高橋悦子）



島崎事務局長による映画の解説（2005.2.27 富津公民館）



ビデオ上映会の参加者（2005.2.27 富津公民館）

海堡夢想

東京湾海堡ファンクラブ幹事 小沢 洋

はじめに

東京湾海堡の未来の活用構想についての夢物語を述べてみたい。西暦2000年から2005年現在まで着々と進められている第三海堡の撤去工事に伴って、明治～大正期の様々な要塞構造物の実態が白日の下に晒されつつある。それらの遺物は、海堡築造当時の日本の防衛や軍備といった一つの歴史過程の動かざる証拠物件であるとともに、海底深い場所に多大な労力を費やして人工島を造るという途轍もない作業に挑んだ当時の土木技術の粋の集積でもある。そのような第三海堡の撤去工事、換言すれば「海中発掘調査」とも言える大プロジェクトの成果が次第に明らかにされている現在の状況の中で、今なお人工島として海上に浮かんでいる富津市地籍の2島、第一海堡・第二海堡の保存・活用問題がようやく本格的に議論の対象として広く取り上げられるようになり、2004年12月18日、富津市内での「東京湾海堡シンポジウム」の実施に至った。しかしながら両海堡の保存・活用といったテーマについては、未だその端緒に差し掛かったという感が強く、具体的な方向性は不鮮明な状況にある。

第一海堡の起工された明治14年（1881）からすでに124年の歳月を経過した今、海堡建設の歴史を踏みしめた上で、今後21世紀社会において、これらの人工島をどのように扱い、活用してゆくべきか、その具体的な構想が求められている。本稿ではその点について、非常に大まかなながらも現時点での筆者の私見を述べ、多角的な議論の一端に加わるべく、この駄文を草することにした次第である。

1. 第一海堡の活用

富津岬とは指呼の距離にあり、昭和20年代を中心とする一時期には、海流の関係で岬と砂洲で結ばれてもいた第一海堡は、現在、財務省の管轄で、事実上、全く放置された状態にあるが、砲台群跡や探照灯跡をはじめ、多くの煉瓦造りの要塞遺構については比較的よく原形をとどめている。2004年8月に草深い現地を視察してわかったことながら、要塞遺構の多くは、明治14年（1881）～明治23年（1890）の築造当初から、その後、大正～昭和初期にかけて補修・改築が幾度か行なわれているようである。ただ「海堡シンポジウム」の席上における小坂一夫氏の説明にもあったとおり、第一海堡の護岸については、1990年代前半と比較しても、大幅な崩落が進んでおり、また海堡内部の構造物についても、長年、観察

してきた人々の言によれば、経年変化による自然崩壊が進んでいるとされる。この海堡の保存においてまず最初に考えなければならないことは必要最小限の護岸工事であろう。

第一海堡の活用について、私が第一に考えることは、一つの「近代化遺産」、「史跡空間」としての保存である。今は繁茂する雑草に覆われて、要塞遺構の詳細を見学する経路も断たれているが、それなりに手を加えて、最小限度の整備をすれば、一つの廃墟空間としてだけでも、蘇生することが可能であることを感じた。「廃墟空間」としての保存の意味については、2003年6月に行なわれた海堡ファンクラブ主催「海堡シンポジウム」の席上でも、岡田昌彰氏（近畿大学理工学部講師）が幾つかの実例を示しながら指摘していたことである。

砲台群・探照灯跡など各要塞間を結ぶ見学路を整備すれば、人々の探索の場、俗に言えば「冒険スポット」として活用することは十分に可能であろう。第一海堡への渡航の手段としては、島内に栈橋を設けて富津漁港から船便を出すことも考えられるが、最も望ましい方法としては、富津岬の先端から簡易な橋を架けることではないかと考える。そうなれば、現在、富津公園内に残る元洲砲台・イテ塔ほか幾つかの射場関連構造物（監視所）などと一体の「近代要塞史跡」探訪コースの一環として第一海堡を位置づけることができるのではなかろうか。第一海堡ほか東京湾海堡群についての説明板、また富津要塞全般に関する説明・案内板を、岬の展望台付近、あるいは富津公園の入口付近に設置することも必要であろう。それと同時に、富津の大乗寺や長秀寺に残る海堡建設の遭難慰霊碑や幕末海防藩士の墓碑などの史跡群とも関連を持たせ、富津地域全体で近世から近代にかけての歴史が探訪できるコースを作ることが最も望ましい。さらに欲を言えば、周辺の青堀・飯野地区には南関東屈指の存在である内裏塚古墳群が分布しており、その歴史の道とも連結することによって、より幅の広い東京湾岸の歴史探訪の空間を生み出すことができるのではないかと考える。

話を再び第一海堡に戻すと、この人工島には残念ながらまだ詳細な図面がない。あらゆる保存活用作業の大前提として、まず詳細な現況図を作成することが急務であろう。それに次いで必要なのは、これ以上、縁辺部の自然崩壊が進まないようにするための護岸工事の実施である。その次に挙げられるのが、個々の要塞遺構の修復と整備であろうが、それをどの程度までやるかについては、先程、述べた廃墟空間としての保存方法もあるであろうし、一気に進める必要もないと思う。島内への入場料金を徴収することなどにより、構造物の維持管理と合わせて、段階的に進めれば良いことではなかろうか。

要塞遺構の間の空間には海浜植物などを植え、公園としても楽しめる場にするとともに、砲台跡の一部を利用して、東京湾の展望スペースとすることも良いであろう。ともかく、この第一海堡という人工島を多くの人に実見してもらい、その中から様々なアイデアも生れてくるものと思われる。

2. 第二海堡の活用

第二海堡に関しては、極論すれば第一海堡とはかなり違った利用方法を私は考えている。それは一言でいえば、東京湾に浮かぶ一つのリゾートアイランドとしての活用である。アメリカ軍による要塞構造物の破壊は、第一海堡に比べて第二海堡の方が著しかったのに加え、その後の島の利用状況から見ても、第二海堡は遺構の改変が著しい。よって、第一海堡と同様に島の現況図作成や、場合によっては発掘調査による記録作成も必要になると思われるが、長期的な構想としては、要塞等の構造物に多少の改変を加えたとしても、この島をより有効活用するためには、リゾート島としての積極的開発を行なうのも、一つの選択肢かと思われる。以下、その空想の概要を述べる。

現在、防火訓練施設として利用されている島の東翼に、3～4階建て程度の宿泊施設を建設する。その最上階は展望ラウンジとして、レストランやバーとするのも良く、昼間には三浦半島や房総半島及び遠く富士山を遠望し、夜にはまた、360度の東京湾の夜景を楽しみながら、東京湾の海の幸を堪能し、海上に浮かぶ小さな孤島での一夜を心行くまで楽しむようにする。

島の西翼の長い部分は、一定の補修工事を施して、要塞史跡として保護すると同時に、東京湾展望台としての役割も備え、沿岸部は場所によって釣り場としても整備する。そして島の中央部砲台周辺には、砲台跡の現況保存を兼ねて資料館を建設し、海堡建設の苦難の歴史や、近代日本の国土防衛構想について説明する一つの近代史学習の場にすると同時に、戦争について改めて考える場とする。

この島への渡航は、現在ある簡易な栈橋を整備・改良して、横須賀市猿島の例を参考としながら、定期船を発着できるようにする。船の出航地は、同海堡が富津市地籍の島であることを配慮すれば、富津漁港が距離の上でも望ましいが、集客性や利便性を考慮するならば、それが東京の日の出栈橋や晴海埠頭であったとしても何ら構わないし、両者を併用しても良いと考える。しかしながら島への一日の渡航人数は限定した方がいいと思うし、そのことによってある意味では贅沢なリゾート地となることも良しとすべきかもしれない。さらに細かいことまで言えば、島への渡航は一日一便に限定し、午

後2時頃を境に来島者の入れ替えを行なうという方式は如何なものだろうか。

次に重要なファクターとして、ホテルや資料館などの施設の電力については、全て太陽光発電や風力発電などの自然エネルギーで賄うことができれば良いのではないかと思うことである。そのためには上記の発電施設を島内に設置することが必須である。第二海堡は、一つは過去の戦争や歴史について思いを馳せる空間として、今一つは循環型自然エネルギーのモデルケースとして、そしてもう一つの着眼点としては、東京湾上に浮かぶ首都圏全体の貴重なオアシスとして、活用することができれば、単なる一地域の活性化を超えた、これ以上の有効な利用方法はないであろうと考える。

この第二海堡にもまた島内全体に、ハマヒルガオなどの海浜植物を始め、四季の花が楽しめるような花壇を随所に設け、人々のくつろぎと精神的な潤い、癒しの場とする。ホテルの宿泊料金や入島料などを、施設の維持管理とともに、環境保護費に当れば、その運営も不可能とは言い切れないだろう。東京湾海堡を地球環境保護の一つのモニュメントし、かつ首都圏のオアシスとして位置づけるためには、このような構想もあながち荒唐無稽な発想ではないのではないかと筆者は思う次第である。

3. 第三海堡の活用

最後に第三海堡の活用について若干の意見を述べる。現在第三海堡撤去工事の引き揚げ物は、横須賀市追浜に展示され、一般来観者の見学を許容している。このことは素晴らしい企画であると同時に、有益な情報開示であると感じる。ケーソンなどと呼ばれるこれらの構造物群が、恒久的にこの場に展示・公開されることが可能なのかどうかについては、まだ明確な回答を得ていない。何分にも場所をとる物件であり、然るべき保存場所を確保することも容易ではないと思われるが、是非とも国土交通省（東京湾口航路事務所）の手配で、これらの遺物ならぬ構造物群が恒久的な保存措置の下に管理されることを望みたい。それは単なる軍事関連遺構のみならず、日本建築技術史の証拠物件であり、また大いなる近代化遺産の一つであることを、国家的に認定すべき産物にほかならないと私は考える。

おわりに

以上、東京湾海堡の今後の保存と活用の方向性について、誠に雑駁ながら意見を述べてきた。この拙文に「東京湾海堡の活用構想」などというおこがましいタイトルを付けず、あえて「海堡夢想」としたのは、その実現に伴う予算も現実性も無視した単なる私的な理想の披瀝、発露の域を出るもの

ではないからである。しかしながら実現性よりも先に理想的な構想やビジョンを述べ合うことは、何事に付けても重要なことであると私は考えており、東京湾海堡に関する保存・活用構想についても、目下の不景気・制約社会の中においては、空想を語る段階に過ぎないと考え、この一文を草した。



第一海堡と富士山 大野繁氏提供

入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人（グループを含む）の入会を募集しております。

入会希望者は、下記入事務局まで申込み用紙をご請求ください。申込み用紙は、ホームページ（<http://www.babu.jp/~kaihoufc/>）からでも入手できます。

会費は下記口座にご送金ください。

銀行振込口座

- 東京都民銀行 御徒町(オチマチ)支店 普通預金 4011598 「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子（トウキョウワンカイハウファンクラブカイケイタカハシエツコ）」
 - 郵便局 00140-9-665909「東京湾海堡ファンクラブ」
- 会費(年間) 個人会員：2,000円 法人会員：10,000円

事務局 〒110-0015 台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル
(株) 地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局
事務局長：島崎武雄 会計：高橋悦子
電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048
HomePage：http://www.babu.jp/~kaihoufc/
E-mail：kaihoufc@babu.jp

「海堡」 *kaihou* No. 8

—東京湾海堡ファンクラブニュース— 第8号
東京湾海堡ファンクラブ 2005年3月2日発行